
夢の王国トイランド

巨太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の王国トイレルランド

【Nコード】

N3384F

【作者名】

巨太郎

【あらすじ】

作者がこれまでみた奇想天外な夢を紹介します。

第一章 「夢の王国トイレルランド vol.1」

これから夢の話語るが、ここでいう夢とは将来億万長者になる！
(表現が古いかな)とか

石油王になる！とか野球選手になるぞ！といった夢ではなく

普段みなさんが寝ながら見ている夢のことである。

私はそれなりに夢を見る。面白い夢から悲しい夢、現実ではまずありえない夢などなど、

様々な夢を見るが残念ながら目覚めたときには殆どの内容を忘れてしまっている。

幸運にも覚えている夢があるが、それはほんとにインパクトが強く忘れられない夢ばかりだ。

また子供のことから何度も見る夢などもある。

そういった夢に関しては「夢ノート」というものを作成し書き留め
てある。

流石にちょっと皆さんの前では話せないような恥ずかしい内容のものもあるが、

それは置いておいて不思議でちょっと変な私の夢を紹介したいと思う。

目が覚めると私はどこかの山奥にある純和風作りの旅館に一人で泊まっていた。

すでに朝日は昇っており、チェックアウト時間が差し迫っていたため清々しい朝を満喫する

暇もなくチェックアウトの準備をした。

家に帰る準備が全て整ったので旅館のカウンターに行き宿泊費の清算をする。

私はどこに來ているのだろうか？という疑問も少しあったが清算も

終わり

旅館を後にしようとした。

すると突然トイレに行きたくなってしまった。部屋でしておけばよかったと思いつつ、

いったん出た旅館に入り従業員の一人にトイレを借りたいと願いだ。た。

すると従業員は「一度チェックアウトされたお客様はお客様ではないので

トイレはお貸しできません！」と行ってトイレを貸してくれない。

私はそんな馬鹿なと思い、旅館の女将を呼んでトイレを貸してくれるよう頼んだ。

しかし女将から帰ってきた言葉も同じで頑としてトイレは貸さないと。いう。

こうなったら何が何でもこの旅館で用を足してやる！と思い、何故か自分でもわからないが

女将や従業員の目を盗み、先ほどまで宿泊していた部屋まで行ってトイレに入ろうとした。

しかし丁度掃除にきた従業員に見つかり、抵抗もしたが「警察よぶぞ！」の一言で私は

おとなしくなり旅館を去った。

私のことが少しは不憫に思ったのか、女将がそつと耳元で囁いた。

「ここから数キロ山を下ったところの丁字路で左に曲がり、暫くまっすぐ進むと

トイレランドがあるからそこで用を足しなさい。」

「トイレランド？」私は女将に聞き返したが、女将は何も答えず次の客の相手をするために

旅館に戻って行ってしまった。

頑なにトイレを貸してくれない旅館の女将と従業員たち。

そしてトイレランドとは一体どんなところなのか？

第一章 「夢の王国トイレランド VOICE」 (前書き)

汚い表現があるかもしれないので
ご飯食べながら見ないでね

第一章 「夢の王国トイレランド vol.2」

女将に言われたとおり山道を30分くらい下っていくとT字路にでた。

トイレに行きたいという状況でなければ山の景色を楽しんだりもしただろうが

今はそんな余裕がない状態だった。

T字路を左に曲がりクネクネうねった道を500メートルくらい進むと明るいネオンと

何やら楽しい音楽が聞こえてきた。

更に100メートルくらい進むとトイレランドの入り口についた。

高さ10メートル幅20メートルの巨大な丸いアーチに赤青黄などのいろんな色の電飾に飾られて

「トイレランド入り口」と書かれてあった。作りは高校などの文化祭レベルだ。

とにかくトイレに行きたいので中に入ろうとしたが入るためのお金がもう殆ど

ないことに気づいたが、その心配は無用だった。入り口入ってすぐの看板には

「園内入場無料。また園内の施設も全て無料。」と書かれていた。

こんなんでどうやって利益を得ているんだ?と思いつつトイレを探すために歩き出した。

「思ったより人がいるんだな。。。」「名前からすると人なんか誰もこないだろうと思ったが

老若男女いろんな人が園内にはいた。

入り口から入って2メートルくらい進むと少し大きな広場にでた。

真ん中には噴水があり

その周りは花壇になっており色とりどりの綺麗な花が咲いている。

その周りには園内のマスコットキャラクターが何人かいて、若いカップルや子供たちが一緒に写真を撮ったりしている。まだ少しトイレは我慢できそうなので

どんなキャラクターか見てみることにしたが、すぐに後悔した。

男性器や女性器や肛門をリアルに再現したキャラクターや、臭いまで漂ってくる

排泄物のキャラクターなど、おおよそ人から好かれそうもないキャラクターだらけだ

なんでこんなキャラクターに子供やカップルが群がっているのか理解できなかった。

マスコットキャラクターのいる池を後にして先に進むと北と東と西に分かれる十字路にでた。

丁度目の前に園内の案内図がありトイレを探したが、トイレのマークがついているのは

北の道をまっすぐ進んで突き当たりのところにしかないようだ。

名前のわりにはトイレの数が少ないなと思った。

数メートル進むと左手に総ガラス張りの建物があった。

しかし中は真っ黒のカーテンに囲われて見えなかった。

入り口には屈強そうなガードマンが二人立っている。

何故だか無性に中に入りたくなり入り口の扉に手をかけた瞬間だった。

警備員二人に後ろから肩をつかまれ放り投げられた。

地面を何回転か転がりようやく止まった。

体中が痛かったが何が何でも入ってやるという気持ちが沸き起こり入り口に向かって

突進した。しかし警備員2人組みは強くあつという間に組み伏せられてしまった。

「もう2度と入ろうとしません!!」と謝り、その場を後にした。

それにしても自分の夢の中なのに入れなかったあの建物の中は何だったのだろう。

更に北に進むと両脇にいろんなアトラクションが見えてきた。

遠くから見たときは普通のアトラクションかと思ったが、全て異常だった。

いくつかのアトラクションを紹介したいと思う。

まずは普通のトイレなのかと思わず中に入ってしまったアトラクションだが

名前が「流れるトイレ」だ。

コンクリートで作られた長方形の建物で、入り口から入ると男用入り口と女用入り口に

分かれていた。見た感じは普通のトイレだったのでようやく用を足せると思った。

しかし中に入ってみると脱衣場がありさらに奥にいく扉があった。

とりあえず服はきたまま奥の扉を開けて中に入ってみた。

確かに流れるトイレだった。部屋の真ん中に幅50センチくらい深さ30センチくらいの

溝が部屋を横切るようにあり中には水が流れていた。

その溝の上で複数の男の人たちがみんな裸で両腕を胸の前で組みながら男らしく

立ち小便や立ち脱糞をしていた。

さすがにそこでする気にはならなかった。

後でわかったことだが、この水は入り口付近の花壇まで続いており綺麗な花たちの栄養分になっているようだった。

とりあえず「流れるトイレ」を後にした。

他にもどこかで見たようだが全てまったく根本的に違う乗り物ばかりだった。

「垂れ流しコースター」これはウォーターライダーのように見えるが

滑っている人は全て真っ裸で水の流れる滑り台の上で脱糞しながら

滑り落ちる

という乗り物らしい。

「垂れ流しコースター」これはジェットコースターのようなものだが乗っている人たちが下半身裸で、大小のものを出せば出すほどスピードがあがるという乗り物らしい。

「大トイレ」見た目は観覧車だが、中に乗っている人々はみな下半身裸だ。

そしてカップルや家族連れみんなで大小のものを垂れ流している。

そのほかにも、見た目メリーゴーランドのトイレ版。

和式と洋式の便器の乗り物や汚物の乗り物にまたがり脱糞している。

「便カート」ゴーカートだが、やはり大小のものを出せば出すほど早く走るらしい。

とまあ、アトラクションの全てが出しまくるアトラクションなのだ。

「みんなどうかしている。。。」「さすがにあんなところで用は足せない私は

一番北にあるはずのトイレに向かって歩き出した。

普通のトイレであることを祈って。

第一章 「夢の王国トイレランド VOI4」(前書き)

トイレランド編ついに完結です

第一章 「夢の王国トイレランド vol.4」

いろんな怪しいアトラクションを通り抜け、トイレランドの一番北にある大きな広場に着いた。

案内図ではフードコートとなっていたが、広場を囲むようにして屋台がいくつか出ているだけだった。

しかも何故か自分の好きな食べ物「たこ焼き」「お好み焼き」「焼きそば」などだった。

かなり食べたかったがもう我慢の限界点を突破する寸前まできたいた。

とりあえずトイレを探すと・・・あった

仮設トイレみたいなのが2つポツンとたっている。

片方はそうガラス張りのトイレで中身は丸見えだ。

もう片方は普通の仮設トイレだ。

しかも凄い長蛇の列で、どうみても100人以上いる。

中には素っ裸で並んでいるやつもいる。

「なんで？いろんなアトラクションで用を足しながら楽しんでいるくせに」

「なんでトイレに並んでるんだ？しかも普通のほうに？これは俺専用でいいじゃないか？」

隣の総ガラス張りのほうに並べよ？特に真っ裸のやつ別に普通のトイレじゃなくてもいいだろう？」

数々の疑問がわき、ちつとも進まない列に苛立ちを覚えそれでも我慢してなんとかまっていたが

もうケツの穴から実がでる寸前で気力だけで頑張っている感じだ。

何度も何度も押し寄せてくる波を何故か手を噛みながら耐えていたが
ついに最後のビッグウェーブがきた。

「ここまでかあ〜」

と思った瞬間目が覚め現実世界に覚醒した。

ホントにもれる寸前だった。

速攻でトイレに行き用を足した。

一息つき、なんか手が痛いなあ思ったら手に噛み後がくつきりついでいた。

体が夢で危険信号を送っていたのかあ、と納得した。

トイレランド・・・とりあえずホントにあつたら行って見たいが臭いはきつそうだなと思った

と、ここでトイレランドの話は終わる。

私は何度かトイレ関係の夢は見る。

トイレランドは1回だけだが、町中からトイレが消えた夢とか、切羽詰っているのに

誰もトイレを貸してくれないとかいう内容の話だ。

大体最後は「もう我慢できない〜」で夢から覚醒してホントに我慢できない状態に陥っている。

皆さんも是非トイレランドに行ってみてください。

もちろん夢の中で

第二章 「プール魔神」(前書き)

トイレランドが奇想天外な話なら

プール魔神は恐怖の話です

文字だけ見るとかわいらしいですが
見た本人はかなりの恐怖でした

第二章 「プール魔神」

この夢は子供のころ何度か繰り返したことがある夢だ。とても怖い夢である。

子供の私は何故かプールサイドの周りを意味もなく永遠に走っている。

大きさは25メートルのプールで8レーンくらいあるプールだ。

疲れてきて走るのをやめようものならとんでもないことが起こる。

走るのをやめた瞬間、プールの中央が突然渦巻き

全身水で覆われたプール魔神が出てきて私をプールの中に引きずり込むのだ。

そして死ぬまでクスグリ続ける。

私は笑いながら水を思いつき飲み込み、そして死ぬ。

気づくとまたプールサイドに立っただけで分けてもわからずプールサイドを走り続ける。

しかも何故かプールから1メートル以上離れないで走り続ける。

一度1メートル以上離れて走ったことがあったが

「それはズルだ」とプール魔神に言われて水の中に引きずりこまれて死ぬまでクスグリ続けられて死んでしまった。

それ以来1メートル以内のところを走るようにしている。

あまりにも何度も苦しい思いをしたものだから、あるときの夢では

プールサイドの半分だけコンクリートの壁をコの字型に作り
プール魔神をプールサイド側にこれないようにした。

そしてプールサイドを走りつかれたときはコンクリートの壁のこ
ろでゆっくり休んだが

やはりそれもずるだったらしい。

また別の日に見た夢ではプール魔神がプールからでてコンクリート
の壁のところまで待っていた。

「壊せ。いまずぐ壊せ。」と脅されて仕方なく壁は壊した。

壊した瞬間プール魔神につかまりプールに引きずり込まれクスグリ
続けられまた死んだ。

そしてまたプールサイドを走り続ける。。。

といった感じのエンドレスの夢だ。

小学生のときだけ見た夢である程度大きくなってからは見ていない。
小さいころプールが嫌いだったのでその影響で見た夢なのかはわか
らない。

でもきつと皆さんもプール魔神は出てこないにしても

同じ夢を何度も見るという経験があると思う。

今度の夢では是非「プール魔神」にあってみてください。

第三章 「第 次世界大戦勃発」

これまた変な夢を見た。

こんな夢を見るのは世界広しといえども私だけかもしれない。
もし見たことがある人はいつてほしい。

私は愛車のシビックEG6に乗ってどこかの街中を猛スピードで走っていた。

時々腕時計で時間を確かめながらあせっていた。

「19:00過ぎてしまった・・・間に合うか？」
自分の夢なのに何に間に合うのかわかっていなかった。

しばらく街中を走っていると携帯電話がなった。

夢の中では知りあいらしいが、実際には知らないやつからの電話だった。

「もしもし？今どこにいるんだよ。もうすぐドイツとの第 次世界大戦始まるぞ！」

「世界大戦？」きよとんとする私。

「何びつくりしてるんだよ。今日からだぞ戦争？さ たまスーパーアリーナに早く来い。」

お前の分の席はとってあるぞ！」

それだけというと友人らしき男は電話を切ってしまった。

「はいく???？」

と思いつつ、更にスピードを上げ目的地のさ たまスーパーアリー

ナに向かった。

何故か19時30分にはさ たまスーパーアリーナにつき、中に入ると東側日本席

西側ドイツ席で超満員だった。自分の席を探していると友人らしき男が

「ここだここだ！」と叫びながら手を振っている。

空いているのはほんと友人らしき男の席の隣だけだった。

そしてあいている席の上にはマシンガンがひとつおいてある。

「もう少しで戦争始まるぞ。構えておけよ。」

「わかった」

夢の中の私は分けもわからずマシンガンを西側のドイツ軍に向けて構えた。

「まもなく戦争が始まります」場内アナウンスが流れる。

「3 / 2 / 1 スタート」

スタートの合図と共に両軍から一斉に銃弾が飛び交った。

「マジかよ・・・」と思いつつ私もドイツ軍に向かって発砲した。

銃弾に当たったものは血しぶきをあげながら。。。消えた???

「何で消えるの？死んだから？なぜ？」

一気に疑問が沸き起こる。

「当たり前じゃないか。死んだらさ たまスーパーアリーナの外に飛ばされて

さ たまスーパーアリーナの周りを裸で1週回った後に、中に戻ってきて両軍の間で正座だろ？

常識じゃないかよ。お前大丈夫か？」

いや、そっちこそ大丈夫かよ？と聞いたかったが黙々とドイツ軍に向かってマシンガンを撃つ。

15分ぐらいたったころ、あらかた両軍ともほとんどの人が撃たれさ たまスーパーアリーナのグラウンドの中央には裸で正座している人々が増えていた。

そしてついに友人らしき男も銃弾に倒れ、消えそうになる瞬間に

「先にいつているぞ」

といつて消えていった。

暫くすると、さ たまスーパーアリーナの周りを1周し終わったようでグラウンドに裸で正座をしていた。

更に10分くらい私も生き残っていたがついにドイツ軍の銃弾に倒れた。

「俺は裸で1周なんかせんぞー！」

というところで目が覚めてしまった。

一番気になるのはどっちが勝ったかだが知る由もなかった。
そしてあんな戦争なら起きてもいいかなと思う今日この頃であった。

第四章 「蘇る死体編 part 1」

私はよくゾンビ系が出る夢をよく見る。

しかしこの夢に関しては記憶が曖昧で夢自体を殆ど覚えていない。

ある程度覚えていている内容のものが3種類あるが、そのうちの1つは面白みが全くないので

今回は2つのうちの1つ目の夢を紹介する。

私は会社に向かって歩いていった。

何故か学ランを着ている。

少し奇妙に思ったがとりあえず無視した。

会社の同僚の一人に途中であつた。

がやはり学ランを着ている。

そこは深く考えずに会社に向かってひたすら真っ直ぐな道を歩き続けた。

会社に着くと何故か全裸の男がうつ伏せに倒れており

背中には包丁が刺さって真っ赤な血が池のように周りに広がっていた。

私「死んでる」

友「どうしよう」

私「とりあえず大きな紙袋に入れよう」

友「それがいい」

意見がまとまると死体をいくつかの細切れにして大きめな紙袋に詰めた。

そして会社のフロアの真ん中に袋は放置した。

運がいいのか悪いのかわからないが、他の社員は誰もおらずバラバラにしたところや放置したところは見られなかった。

その日仕事が終わるまで結局誰にもあわず、2人は定時になったらとつと家に帰った。

2日後。

死体を詰めた袋はまだフロアの中央に転がっており、異臭や変な汁が袋からでていた。

私は何故か今後起こるであろうゾンビ軍団との戦争に備え何故か「ベアー」「ロウ」を両手に装備していた。

友は死体の入った袋の周りをウロウロしていた。

そしてついに闇のゾンビ軍団が襲ってくる日が来た。

会社の前で私と友は待ち構えていた。

するとくるわくるわで絶対勝てないと思いきブアップしようとしたら

目が覚めた。

よだれダラダラだった。

ゾンビを食ったのか？と思わせる夢でした。

結局落ちも何もなくこの夢は覚めてしまった。

第四章 「蘇る死体編 part 2

もうひとつのゾンビ系の夢がこれから話す内容だ。

この夢は何度かみたが最初から結末までだいたい同じだ。

とある研究施設があった。

研修施設といっても建物は四角いビルで、広さはワンフロアが東京ドーム一個分くらいだ。

ちよつとありえない広さのビルだがまあ夢なのでしょうがない。

地下3階の地上10階ある建物だ。

そして我々20人は銃火器で完全武装しビルの入り口の前に来た。た。

しかし何故か私だけは武器は何も持たずに普段着のまま来ていた。

何故このビルに完全武装してきたかというと、ビル内でウィルスが舞い

研究員全員（何人いるか不明）がゾンビ化してしまったので退治するためだった。

私は武器を持たないので降りたかったが、部隊の隊長は帰ることを許さなかった。

「君はゲームのように建物の中で武器を探しなさい」

といわれた。

まあ20人も仲間がいるんだから大丈夫だろうと思い、仲間と一緒にビルに侵入した。

中に入ると床中に得たいの知れない液体がなみなみと漂い、その液面の10cmくらい上に金網の床が作られていた。

かなり頑丈にできているらしく、全員が乗っても歪むことすらなかった。

一番奥に階段とエレベーターがあり、隊長は6人を階段を使って下に行かせ

残りの14人は（私を入れなくて14人）階段を使って上にいくぞといった。

私は何故か一人エレベーターに乗り、屋上まで行ってしまった。

屋上につきまわりを見渡すとゾンビはいなかったが何故かロッカーがひとつあった。

あけてみるとようやくマシンガンタイプの銃と弾を50発ほど手に入れた。

これで安心と思いエレベーターに乗ろうとしたが、いつの間にか動かなくなっていた。

しょうがないと思いつつ階段で降りることにした。

10階につき部屋を見渡すが何もなかった。

何故か部屋を照らす証明は全て黄色だった。目がとても痛くなった。

ほんとにゾンビなんているんだろうか？と疑い始め9階に下りたそのときだった。

フロアをゾンビが埋め尽くしていた。

ほんと埋め尽くしていた。

とにかく埋め尽くしていた。

そのため動けないようだった。

弾がもつたいないため8階に下りることにした。

あとで焼き払うか何かすればいいだろう。

もしかしてあれで全部か？と思ったら8階には犬タイプのゾンビが3匹いた。

そして見つかった。

私は階段を上って逃げた。

犬は唸り声を上げながら追っかけてくる。

屋上につきロッカーの中に隠れた。

見つかるな。。。とおもったが臭いをかぎつけたのかあっという間に見つかった。

そして凄い勢いでロッカーに体当たりなどをしてくる。

「こんなときに・・・」

私はもよおしてきた。

とにかくいなくなるまで耐えるんだ。

もしくは他の仲間が助けしてくれるまで耐えるんだ。

しかし犬の攻撃は休まることをしらない。

逆にあかないことに苛立ちを覚えたらしく攻撃は鋭さを増す。

しかしこちらの限界が来ていた。

そしてもうだめだと思いロッカーを開けた・・・

というところでホントに目が覚めた。

膀胱が破裂寸前でトイレに駆け込んだ。

どうやら私の夢はトイレにかかわるものが多いようだ。

というところで蘇るゾンビ編はこれにて閉幕。

第五章 「地底帝国編」

みなさんは地底帝国にいったことはあるだろうか？

ドラ もんやセンター ブジアーヌなどにでてくるあれだ。

もちろん私はいったことはないが夢では行った事がある。

自慢にはならないが。。。

しかもいつだって地底帝国についたとたんに目が覚めるのでちゃんとは行った事ない。

そのときの話をしようとおもっ。

私は学生服を着ている。
だから学生なのだろう。

しかし回りにいるのは大人になってから知り合った人ばかりだった。
しかし何故か制服を着ている。

よくわからないが楽しいおしゃべりをしながら下校しているようだった。

すると突然地面のありとあらゆるところから半径30センチくらいの穴が開き
手が出てきた。

そして近くにいる人の足をつかみ地面の中に引っ張りこんでいった。

半径30センチなのになんで人間が中に吸い込まれるんだ？
と細かいことを考えながら最初は逃げ回っていた。

すると足元に大きな木の枝があったので、それを拾うと攻撃に出た。
何十何百と上から叩いても倒した様子はない。

気持ち悪いがその手を引っ張り引っっこ抜くことにした。

親友らしいA君に手伝ってもらい一つの手に目標を定めて引っっこ抜く。

しかしかなりの力で引っ張り返された。

A君に体を支えてもらい、更に力をこめる。

「ぼんっ」

勢いのいい音と共に手首を引っ張りあげた。

「なんじゃこりゃあ?」

そうほんとなんじゃこりゃ?なのだ。

引っっこ抜いたのは手爺だ。^{てんじい}

夢の中の私が手爺だ!といているので間違いない。

手爺とは、出首の下がお爺ちゃんの顔になっている化け物だ。
ちようど手首よりしたに人間の顔を逆さまにし口より上がくっついている。

そして顔はとても貧相なお爺さんだった。

口はないが鼻で

「ムホホホホ」

といった気味悪い笑い声を上げている。

どうやら地底に住んでいる生き物らしい。

その手爺を捕まえたことで油断してしまった。

他の手爺に足首を捕まれ地底に引きずり込まれようとしていた。

「はなせ！」

抵抗したがとても力が強くそのまま引きずり込まれた。

やはりこんな小さな穴にどうして入ることができるんだ？

と疑問も沸いたがそのまま引っ張られ続けた。

何分足っただろう。

自分の体より一回り大きな穴を私は落下し続けていた。

まさにセンターオ ジアースだった。

しかもいつのまにか手爺はいなくなっていた。

新たな人間を捕まえにいったのだった。

真っ暗闇の中をいつまでも落ちていき感覚が麻痺してきたころ突然下のほうが明るくなった。

そして穴を抜けたとたん、とてつもなく大きな空間に出た。下を見ると私がいた世界と同じような家が立ち並んでいる。

ただし日本のような建物ではなく中世アラビアのような建物だった。

人間らしき人の歩く姿も見える。

しかし落下速度はとまらずそのまま落ちていく。

「ああ、このまま死ぬのか。。。」

そして目が覚める。

さすがにこの夢のときはもよおしていなかったが続きを見たかった。

一度落ちたけど命は助かり地底帝国を歩いた夢もあったが内容は忘れてしまった。

是非皆さんのなかで地底帝国を満喫されたかたがいたら教えてほしい。

第五章 「地底帝国編」(後書き)

夢はたくさんみますが

奇妙奇天烈な夢は残り少ないです

というところでもうすぐ最終回

最終章

やはりこの小説は「トイレランド」ではじまり「トイレランド」で終わりたいと思う。

私はいつも見慣れた町を歩いていた。

珍しく学校の制服は着ておらずスーツ姿だった。

夢の中では社会人なのに学生服きたりしていたが今回はまともな力ツコをしていた。

しかしそれ以降はいつも通りだった。

急にもよおしてきたのだ。

とても家まで我慢できそうもないので勇気を振り絞り

見知らぬ人の家でトイレを借りようと決心した。

現実世界ではどんなに苦しくても見知らぬ人の家で借りることはないだろう。

まず「トイレ貸してください」といっても、よっぽど人がい人じゃないと怪しまれて

貸してもらえないだろうし、もし借りられたとしてもトイレが臭くなったり糞尿まみれ

になったら嫌だなあとと思うと借りられない。

さて話は戻るが勇気を振り絞ったが、どの家もトイレを貸してくれなかった。

そんな馬鹿な・・・という理由ばかりだった。

「うちにはトイレがないのよ」

「うちはトイレ故障中なの」

「うるさい帰れ」

などといわれた。

「トイレがない」「トイレが故障中」の家には一応家の中を見せてもらったがホントにそのとおりだった。

留守の家があり、ドアがあいていたので中に入るとやはりトイレはなかった。

どうなっているんだ？

しかも近所の公園にあった公衆便所まで消えている。

こうなったら家まで帰ってトイレに行くか、どうしても間に合わない場合は野に出すしかない。

とりあえず家まで行くことにした。

しばらく歩くとどこかで聞いたことのあるような音楽が流れてきた。
そしてその音がでているところの前まで来た。

家と家の間に通路ができていて、人がたくさん入っっていく。

その通路には、高さ5メートル幅5メートルの少し小さな丸いアーチがあり、赤青黄などのいろんな色の電飾に飾られて

「トイレランド入り口」と書かれてあった。

「地元にもできたのか？トイレランド・・・」

早速中に入るとどういふ空間になっているかわからないが、家と家
の間の空間を抜けるとかなり広い場所に出た。

そして真ん中には噴水があり、その周りは花壇になっており色とり
どりの綺麗な花が咲いている。

しかしこの花の肥料のことを考えるとあまり素直には喜べない。
（第一章を参照してね）

その周りには園内のマスコットキャラクターが何人かいて、若いカ
ップルや子供たちが

一緒に写真を撮ったりしている。

しかし今見るとホントグロイキャラクターばかりだ。

なんとなく落ち着いてきたので少し周りをみる余裕ができてきた。
園内マップをみるとアトラクション類の数や種類はまったく同じっ
ぽい。

とりあえず普通のトイレを探すとやはり園内の一番奥にあるようだ。

一番奥にある普通のトイレに向かって歩いていくと

前回山奥で訪れたトイレランドでは入ることができなかった

総ガラス張りの建物で中は真っ黒のカーテンに囲われて見えないと
ころがあったが、

今回はその入り口にガードマンがいなかった。

「チャンスだ！」

そう思い、その建物の入り口の扉のノブに手をかけたが開かない。

仕方なくガラスを割って中に入った。

中にあっただのは・・・資料館だった。

トイレの歴史を知ることができるらしい。

ふと床をみると

「キミにはれないためのカモフラージュさ」

と書かれたメモ用紙がおちていた。

なんのこっちゃと思いながら、確かに少し怪しいような気もしてた。しかしだいたいタイムリミットが近づいてきた。

やはり通常のトイレの列は凄い列で我慢できるかどうか微妙だった。しかし並ぶしかない。

トイレを並ぶ列はとても複雑に曲がったり、他のアトラクションとクロスしたりして

進んでいる。

なんかおかしいな？と気づいたときは

「大トイレ」の列に並んでいた。現実世界でいう「観覧車」だ。

本来なら下半身裸で、用を足しながら優雅に空の散歩を満喫するらしいのだが

私は脱がなかった。しかもなんでこんなものに乗ってしまったんだ。しかもこの観覧車は世界最大級の大きさを一周するのに30分はかかるという。

15分たち私の乗っているゴンドラが天辺に来た。

そして止まった。

そして落ちた。

落ちた。

落ちた？

そして目が覚めた。

現実世界では前ほど切羽詰った状態ではなかったが催していた。

やはりトイレへのサインだったのだ。

今度はアトラクションにトライしてみるか。

最終章（後書き）

夢それは切なかったり、儂かったり、楽しかったりと色々あると思う。

今度はそういう夢の話を書こうかな？

トイレマンション(前書き)

続・夢の王国トイレランド

トイレランドはその後行っていないませんが
少し変わった夢を見たので紹介したいと思います。

トイレマンション

またもや私は夢の中で学生になっていた。

学生気分が抜けないのだろうか？

人と話をするときについて通勤中のことを通学中とか

会社のことを学校とか言ったりしてしまう。

自分ではそんなつもりはなにのだが・・・

私は高校生だった。

そして通学している高校で好きな子が出来た。

名前は葵ちゃん。

偶然にも日本で今女の子につけている名前第一位の名前だ。

夢を見た後ニュースで知った。

整った顔立ちに、肩より長い黒い美しい髪が印象的な彼女だ。

勇気を持つてはなしかけると今夜夜十時に家に来てほしいといわれた。

彼女は近くのマンションに住んでいるらしい。

夜が来るのが待ち遠しかった。

そして夜9時半、もうマンションの前についてしまった。

夢の中だから展開がめっちゃ早く早い。

まだ時間までは早すぎるので近所を散策することにした。

すると一軒家のベランダで双眼鏡を持っていたところをのぞいている男がいた。

レンズの分厚い黒縁のめがねをかけ、髪は伸び放題のボサボサ頭でヒゲもボーボー

ヨレヨレのTシャツに、ケミカルウォッシュのジーンズと、とてもお友達にはなりたくない

容姿をした男だった。

なんかイラつときて、つい足元に転がっていた手頃な大きさの小石をつかむと

その男めがけておもいつきり投げた。

見事にその男に命中し「ギャー！」と倒れた。

「よっしゃ！」とガッツポーズをとっていると、マンションの更に向こうから

いろんな意味での私のライバル宮本あきらが歩いている。

何故か夢の中の私は、彼も葵ちゃんに会いに着たんだと直感で感じていた。

俺のほうが先に葵ちゃんに会ったと思いマンションの入り口に駆け出した。

葵ちゃんのマンションは11階立てでコの字型をしており、各階50くらいの部屋がある。

葵ちゃんの部屋は10階だと聞いていたのでコの字型の真ん中にある階段を上っていく。

11階立てなのに階段がないのが辛い。変なマンションだ。

住民からクレームはないのか?と思いつつ階段を駆け上った。

普段の運動不足がたたってか、3階まで来たところでもう息があがってきた。

下をみるとあきらま階段を上り始めている。

追いつかれるわけには行かないので更に勢いよく階段を駆け上がる。

早くつけ〜と思いながら階段を上がっていく。

そして10階についた。

しかしあることに気づく。

10階のどの部屋なのか？

そもそも葵ちゃんの苗字はなんなのか？

何一つわからなかった。

とりあえず端から一部屋ずつ玄関の扉を開けて調べていくしかない。

人の家だが構わず扉を開けていく。

無用心なことに鍵はかかっていなかった。

そして扉を開けてびっくりした。

扉をあけるとそこにはトイレがあったのだ。

作り話ではない。いや現実には夢の中の話だから作り話なのだが

ほんとに夢で見た話だ。

トイレの扉を閉め次の扉を開けるとまたトイレだ。。。

次も次も次もトイレトイレトイレ・・・

何だここは？うわさのトイレマンションか？

そう学校で噂になっていたのだ。

トイレばかりあるトイレマンションが。

ある意味怖い。

噂といってもあくまで夢の中の話なので勘違いしなくてももらいたい。まあ勘違いする人はいないと思うが。

コの字型の最初の角を曲がり更に扉を開け続けるがやはりトイレは
っかりだ。

ほんとに葵ちゃんの家はあるのか？

そうこうしているうちに、あきらも10階についたようで扉をあけて

「なんだこりゃ？」と声を上げている。

30個目くらいの扉を開けたときだった。

6畳一間の畳の部屋が目に入り、中央には坊主頭でソリコミ入れた
180センチで体格はそこそこの私より腕や足や胴周りが2倍以上
ありそうな

強面の男が胡坐をかいて座りこっちをみていた。

「すみません」と誤り扉をしめようとしたが、片隅に葵ちゃんが座
っていた。

「来てくれてありがとう中に入って。」

怖かったが中に入ることにした。

「葵の友達か？よく来たなまあ座れ。俺は葵の兄貴だ。」

とても葵ちゃんとは兄弟とは思えない顔をしていたが

「はじめまして」と挨拶をした。

何も無い部屋だ。座布団しかない寂しい部屋だった。

ここに住んでいるのだろうか。

そういえばお土産を買ってきたんだっと思った出し、

葵ちゃんのお兄さんに渡した。

何故かコンビニで新発売のオニギリで

普通のオニギリを半分に割った新しいオニギリと書いてあった。

ようは普通のオニギリより小さいだけだ。値段は50円と安い。

4個買ってきたので3人で分けた。

3人は無言でオニギリを食べ始めた。

するとあきらがこの部屋の扉をあけた。

「鍵をかけたのか？」

葵ちゃんのお兄さんが咆哮した。

「ごめんなさい」と謝り、私はあきらを蹴り扉の外に追い出した。
われながら酷い奴だと思ったたら私もお兄さんに蹴り飛ばされ
追い出された。

そして扉には鍵がかけられ、何をしても入れてもらえなかった。

私は泣いた。するとあきらが私の肩を優しくポンポンと叩いた。

二人は笑いながら家に帰った。

おそらく・・・

トイレマンション(後書き)

今後も不定期ですが

夢の話を書かせていきたいと思います。

アリ

この日私の見た夢は2本立てだった。

1本目の夢はとても怖い夢だったことは覚えているが内容が思い出せない。

しかも今回が初めてではなく2回目の夢で、前回と結末が変わりかなり怖かったのだけは覚えている。

そしてその恐怖で目が覚め、まだ起きる時間まではもう少しあったので2度寝をした。

そしてまた夢を見たのだった。

暫くぶりで私は実家に帰っていた。

車で30分くらいのところに両親は健在で、あまり近すぎるせい、いつでも帰れると思いい

年に1度帰ればいいほうだった。

今日も思いつきで帰ったので両親には連絡を入れなかった。

案の定家には誰もいなかった。

実家の鍵は持っているので中には入れるが、家の回りを一通り見て回ろうと思った。

家の周りといっても、近所を歩きまわるまでではなく、家屋の周りだ。実家は普通の建売住宅で家屋の周りを囲むように壁があり、隣はすぐ別の家が建っている。

家屋の周りを歩いて丁度玄関からすると裏側に回ると
といつのまにか色々な果物などの木が植わっていた。

リンゴ、グレープ、栗、梅、そして昔から父親が好きだった柿の木が数本植わっている。

全て実がなっているが、冬なのにまだ青々とした色だ。

恐らくこのまま熟すことなく腐るのだろう。と夢の中では勝手に思っていた。

そしてある柿の木の前に来たとき足が止まった。

緑色に光沢を放つ大きさが50センチもあるカメモシだった。

しかも臭いも半端じゃなく臭い。

小さい頃見たのは大きくても1〜2センチくらいの大きさのものしか見たことないので

とても巨大に思えて捕まえようとした。

しかしゴキブリ並みに動きが早くあっという間に逃げられてしまっ

た。

少し追ってみるとやはり同じ大きさの黒光りしたカメムシがもう一匹いた。

臭いは先ほどのカメムシ以上だった。

耐え切れずその場は逃げることにした。

家の玄関の前になるとやはり大きな柿の木がある。

この木は忘れもしない、30年前弟が生まれたときに、母親が父親に粉ミルクを買ってこよう頼んだ。

父親と私は近所のホームセンターに行った。

そこで父親は丁度もらったお金と同じ値段で売られている柿の木を見つけて買ってしまったのだ。

それを家に持ち帰った父親が母親に怒られているのはいまでも覚えている。

そんな思い出のある木なので30年いき続けている実家では長生きの木の一つだ。

しみじみと柿の木を見つめて思い出にふけっていると

耳元で「ぶん」と羽音をたてて飛んでくる黒い物体がいた。

柿の木に止まりじっとしている。

小さい頃カナブンから小便をかけられたことがあるので、寒くもなってきたので家に入ることにした。

玄関の扉の鍵をあけて入ろうとして、ふと玄関の横にある1畳くらいの広さのコンクリートで

埋められていない土の部分を見た。

そこにアリの巣が3個あり、冬だというのにアリが複数蠢いている。家に入りヤカンに水をなみなみと汲むと、また外にでてアリの巣めがけて流し込んだ。

すると土がみるみると崩れ落ちていきアリの巣が奥のほうまであらわになり

何十匹何百匹というアリがわらわらと巣から這い出て来た。

「これはやばい」と思い、私はもう一度家に入り、ヤカンに水を入れて沸騰させて玄関まで戻った。

扉を開けると庭一面アリが覆いつくしていた。さながら黒い絨毯だ。何故か玄関には入ってこないで安心だが、いつ入ってくるかわからない。

とりあえず足元のアリの絨毯にむかって熱湯をかけた。

白い湯気とともにアリの焼ける異臭と「キーキー」と泣き声が聞こ

えてきそうだった。

しかし一部のアリを殺してもいまや何万匹いるのかわからないアリのごく一部を殺しただけだ。

どこにこんなにアリがいたのか？家のしたは全て空洞か？と思わせるほどの数だ。

もう一度家に入り、ヤカンに水を入れて沸騰させて外に持っていく。

もう私一人で対応できるレベルをとくに超えている状態に陥っていた。

家の庭どころか、外までもがアリで覆い尽くされている。

たぶんアリも重なっているのだろう。

地面と玄関は10センチくらいの段差があるはずだが、いまは同じ高さまでアリがいる。

とりあえず足元のアリたちに熱湯をかけて殺す。

またもや異臭とアリの鳴き声らしき音が聞こえてくる。

すると黒い絨毯の一部が盛り上がった。

何事かと思ったら黒い絨毯の下から女王アリがでてきた。

それが立ち上がった。

高さは2メートルはあり、私よりでかい。

そして出てきたと思ったたらまたもぐっていく。

なんだったんだ？

と思ったら目が覚めた。

アリも一匹なら怖くもない。

しかしあれだけ集まるとさすがに怖いと思った。

色々な映画でもたくさんのアリができて人間を襲うシーンがでてくるが

実際に熱帯地方かアフリカかわすれましたが、黒い絨毯とおそれられている

アリ軍団があり、ご飯を探しに何十万匹というアリが移動すると

動くものは何一つ残らないそうです。怖いですね。

からくり屋敷編 part 1

夢の世界で何度か足を踏み入れたことのあるからくり屋敷。

遊園地のアトラクションとかではなく

どこかの街の色々なビルが立ち並ぶ中にそれはあった。

外から見るとどこかのデパートのようであり

大きな垂れ幕やアドバルーンには「からくり屋敷」と書いてある。

アトラクションの内容は10階建てのビルの屋上までいくというものだ。

そこにいくまでには様々なトラップが仕掛けられており

それをクリアして屋上にたどり着くと莫大なお金がもらえるということだ。

しかしアトラクションといって舐めてはいけない。

前に私が挑戦したときは一緒にチャレンジした人々はすべて死んでしまったのだ。

そしてビル内のいたるところに血まみれの遺体が転がっていた。

私は運良く9階までたどり着き、あと一步でゴールというところでリタイヤした。

夢から覚めたときに記憶が飛んでしまったので殆ど覚えてないが
とてつもなく怖かったことだけはなんとなく覚えてる。

そのせいで夢から覚めてしまったほどだ。

そして数カ月後、またそのアトラクションに夢の中でチャレンジで
きた。

しかし今回は1階でリタイヤという悲惨な結果だった。

今回はその1階部分の内容しか書けないが

今後続きを見ることがあつたらまた書きたいと思う。

私は妻と13:00に街の中にある噴水広場で待ち合わせをしてい
た。

しかし12:00には噴水広場についてしまったので街中を色々見
てまわることにした。

すると元は有名デパートだった建物を改装して建物全体がひとつの
「からくり屋敷」という

アトラクションになっていた。

入り口には説明書きがあり、「屋上に着いた人には莫大なお金がも
らえるよ」と

文字の周りにデコレーションもされ、かわいらしく書かれていた。

しかしその横には小さく血文字で「でも死んでもしらないよ」と書かれていた。

ちょっと怖かったが、入場料は1000円だし、まだ待ち合わせまでは1時間近くあるので

とりあえず入って見ることにした。

入り口でパンチパーマのおばちゃんに1000円払うと早速中に入ることにした。

時間は無制限らしい。

これは余裕だろうとおもったが、前にも夢の中で入ったことのあるので

ちょっとややこしいが夢の中の私も「あれ？一度ここにきたことがあるような気がする」

と思った。

重々しい扉を開けて中に入ると幅3メートル、高さ5メートルくらいのまっすぐ伸びた

通路が200メートルくらい続き、そこで右に折れていた。

前後に客がないことに気づき急に心細くなり、慎重に前に進んで

いった。

10メートルくらい進むと左右の壁に直径10センチくらいの穴が等間隔に100個くらい

あいていた。いかにも怪しい穴だったのでいきなりは先に進まず右足だけそつと

前に出してみた。

すると穴という穴から鋭く先のとがった槍のようなものが勢いよく突き出された。

急いで足を引つ込めたので刺さりはしなかったが、刺さったら怪我をしていただろう。

完全に槍が突き出ると、ゆっくり穴に向かって戻っていく。

その瞬間を逃さず私は第一関門のトラップを素早く通り過ぎた。

更に10メートルくらい進むとまた同じトラップがあったが

同じ方法で難なくクリアした。

ホントに命がけのゲームのようだ。

からくり屋敷編 part 2

左右の壁から突き出る槍のトラップを交わして少し進むと

背後から絶叫が聞こえてきた。

後ろを振り向いてみると私の後に入ってきた10代の若者が槍にで串刺しになっていた。

どこから現れたのかわからないがすぐに係員らしき黒服黒眼鏡の男が数人現れて

死体を跡形もなく片付け何事もなかったように帰って行った。

血の染みなどもひとつ残らず無くなっていた。

アトラクションのくせになんて恐ろしいところだと再認識し

気を引き締めて先に進むことにした。

左右から突き出る槍のトラップを交わすと今度は上下から突き出る槍のトラップがあったが

これも難なく交わすと通路の端につき、そこを右折して進んだ。

すると少し大きめな広場にでた。

そこには見渡す限りの陳列棚が並び、服や帽子、そして本や電化製品などが

所狭しと積まれている。

そしてその陳列棚にあるものを片っ端から引っぺがして何十人もの人が

何かを探しているようだった。

そのとき前回挑戦したときのことをボンヤリとだが思い出した。

この陳列棚のどこかに眠る何かを探さなければ次の階にいけないのだ。

しかしその何かがい思い出せなかったがとりあえず私も周りのみんなの真似をして

服や帽子がおいてある棚から探し始めた。

どういう原理かわからないが一度棚のものをひっちらかしても、

いつのまにかそれは自然に綺麗に陳列しなおされている。

前回の夢の中では、その何かを簡単に探し出しで上の階にいったはずだが

今回はまったく見つかる気配がない。

高さ1メートル50センチ、幅10メートルくらいの棚を既に3つほど探したが見つからない。

ほんとにその何かはあるのだろうか？周りのみんなも見つけている様子はない。

時間だけがどんどん過ぎて苛立ちが沸き起こる。

これは入場料の元を取らなければと、気に入った服などをカバンの中にくすねておいた。

くすねては駄目というルールはないので泥棒にはならないだろう。

どれだけ探しても見つからず、もう妻との待ち合わせ時間が迫っており

もうここを出なければと思ったらしいの間にか建物の外に出ていた。

しかもいつのまにか片手にはホットドッグをもちっており、ケチャップで

「ありがとうございます。またのご利用をお待ちしております」と書かれている。

これは参加費なのか？食べるとおいしかったが冷たかった。

ちなみにカバンにくすねたはずの服などは全て消えていた。

からくり屋敷編 part2(後書き)

次回こそはからくり屋敷最上階を目指すぞお

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3384f/>

夢の王国トイランド

2010年10月8日13時03分発行